

高齢者を周縁化させない大須コミュニティの取り組み —若者・外国人の間で自然体で生きる高齢者たち—

長 坂 康 代

要 約：名古屋市の大須学区では、「巡回型高齢者自立支援生きがい通所事業」として「にこにこクラブ」という高齢者のための行政の事業が、商店街の一角で週1回おこなわれていた。行政側の現場担当と、利用者の声を聞いて集約させる高齢者ボランティアが仲介者となり、ともに連携して高齢者コミュニティを形成していった。これは、高齢者が周縁化されずに「外へ出る自立支援」「生活する上での生きがい」になったことを明らかにした事例研究である。

キーワード：高齢者、メディエーター、ボランティア、官と民の協同、コミュニティ

1. はじめに一都市に在住する高齢者の コミュニティづくり

2006年、日本の総人口に占める65歳以上の高齢者人口の割合（高齢化率）が21%になり、世界一になった。日本の高齢化が進むなか、名古屋でも高齢者を対象とした取り組みがなされている。

小川は、「都市における相互扶助システムとしてのコミュニティづくりが絡んでくるとすれば、個人主義化を乗り越えた新しい連帯主義の可能性が開け、それぞれの時と場所と人間によって多様な福祉社会が展開する可能性も出てくる」（小川：1996）と述べているように、まさに大須の高齢者コミュニティづくりは、行政によってなされてきた。しかし、行政の取り組みに頼るだけでなく、それを契機に高齢者がそれを発展継続させていく力が、大須にはあった。

大須学区は、高齢化問題だけではない。外

国人の流入は国際化の象徴だが、それに伴う問題が発生している。特に、大須4丁目は、フィリピン、中国、韓国などからの外国人労働者の居住地になっており、児童手当や生活保護の問題を抱えている。ある不動産屋の客は、外国人が半分を占める。大須小学校には、ときどきまったく日本語が話せない子が転入してくることもある。

そのような高齢化・外国人問題を抱える大須で、筆者は、2004年から2006年の3年間、中区福祉協議会による福祉事業「にこにこクラブ（以下、「にこにこ」）に関わり、都市における高齢者のコミュニティ調査を遂行してきた。本稿では、若者や外国人が多い街で生きる大須の高齢者に焦点をあてる。ここで、高齢者が、行政が始めた事業への参加を契機に、自分たちでコミュニティを再構築している様態を論じ、若者や外国人の往来するなかで高齢者が自然体で生きる姿を提示したい。それが、結果として、官（行政）と民の関係

(2) 高齢者を周縁化させない大須コミュニティの取り組み

を問うことにもなるだろうⁱ。この事例と同じように、筆者は、ベトナム社会主義共和国の首都ハノイで、官と民の拮抗と接合を描いてきた。本稿は、日本とベトナムの官と民の接合を比較研究する上でも、重要な位置づけをもつことになる。

2. 大須の高齢者を支える各組織

名古屋市健康福祉局によれば、「要介護認定」に該当しない高齢者は、「高齢者自立支援生きがい通所事業」に参加することができた。対象者は、「身体的にやや虚弱な、おおむね65歳以上の方」であった。内容は、「高齢者の方の介護予防や自立した生活の支援及び仲間づくりなどの社会参加の機会を提供するため、健康増進活動やレクリエーション活

動を行う」ことになっている。拠点型は16区の福祉会館で、巡回型は各区のコミュニティセンター（以下、コミセン）などが会場である。大須の「にこにこ」は、この巡回型の事業に該当した。

中区社会福祉協議会は、上前津駅近くの中区住宅サービス内1階にある。2階はデイサービスの施設になっており、介護が必要になった利用者が、デイサービスやケアマネジャーを必要とする他の事業を迅速に受けることができるように連携が現在もなされている。

2-1. 高齢者を下支えする多様な取り組みと横のつながり

中田によれば、名古屋の地域住民組織の中心は学区組織である。学区は住民と行政との

表1 男女別・年齢3区分別人口（2000年10月時点）

学区別				年齢3区分別人口			年齢3区分別人口の割合(%)		
	総数	男	女	0-14歳	15-64歳	65歳以上	0-14歳	15-64歳	65歳以上
中区	64,669	31,207	33,462	5,843	42,573	10,993	9.0	74.0	17.0
名城	4,052	1,899	2,153	440	2,666	658	10.9	65.8	16.2
御園	2,053	1,109	944	141	1,305	443	6.9	63.6	21.6
栄	5,893	2,943	2,950	496	3,772	1,040	8.4	64.0	17.6
新栄	7,424	3,535	3,889	537	4,327	1,407	7.1	58.3	19.0
千早	3,614	1,771	1,843	379	2,310	623	10.5	63.9	17.2
老松	8,869	4,277	4,592	759	6,075	1,275	8.6	68.5	14.4
大須	7,201	3,377	3,824	581	4,768	1,417	8.1	66.2	19.7
松原	5,503	2,676	2,827	605	3,658	920	11.0	66.5	16.7
橘	7,987	3,757	4,230	804	5,501	1,157	10.1	68.9	14.4
平和	6,493	3,182	3,311	520	4,473	1,069	8.0	68.9	16.5
正木	5,580	2,681	2,899	591	3,718	994	10.6	66.6	17.8

(中区社会福祉協議会より提供)

i 筆者は現在、名古屋市内のハウスレス支援を調査している。官と民の在り方やボランティアの立場を再考するうえで、本稿は重要な位置づけを提示することにもなるだろう。

表2 2003年度 ひとり暮らし高齢者の学区別人数

学区	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
名城	36	36	36	36	35	35	35	33	33	32	32	33
御園	4	4	4	4	4	4	4	4	4	5	5	5
栄	103	103	103	101	101	107	109	107	107	105	108	108
新栄	190	194	202	200	199	202	201	201	203	208	201	202
千早	52	52	52	53	56	51	51	50	50	50	50	50
老松	138	137	136	136	136	135	136	137	138	138	139	158
大須	188	186	185	185	184	184	196	200	197	193	180	180
松原	97	97	94	96	95	96	96	95	95	92	88	88
橘	93	93	93	92	92	92	93	93	93	86	86	88
平和	115	114	114	115	113	116	117	118	118	116	113	113
正木	89	89	88	88	87	85	84	84	84	84	78	78
合計	1105	1105	1107	1106	1105	1107	1122	1122	1122	1109	1080	1103

(中区役所介護福祉課より提供)

接点として伝統的に重視されてきた。「学区中心主義」は住民と行政の両者からの地域管理の接点としての意味を持ち続け、現在に至っている(中田:1990)。それに照らし合わせると、大須には、「大須学区連絡協議会」という組織がある。消防団、保全委員、PTA、老人クラブなど13団体と、青少年育成委員会、コミセン運営委員会、古紙サイクル委員会、交通安全委員会、防火推進協力会の直轄5団体の計18団体によって組織化されている。そのような横のつながりが強固な地域組織が連携して、大須の高齢者をも支えているのである。

行政による事業である「高齢者ふれあい給食サービス」(以下、ひとり暮らし食事会)は、おおむね65歳以上のひとり暮らしの方を対象にした会食型の給食サービスである。大須での参加者は、60～80名ぐらいであった(2004年)。行政による「にこにこ」、「老人クラブ」、

「ひとり暮らし食事会」など、いくつかの事業を掛け持ちする高齢者が多いということであった。ここからも行政の事業を「上手く使う」高齢者の姿がみえてくる。大須の「にこにこ」利用者も、5人が「ひとり暮らし食事会」に参加していた。

中区全体の人口は、64,669人であった(2000年時点ⁱⁱ)。中区の男女数をみると、男性31,207名、女性33,462名で、男女比に大差はない。65歳以上は10,993名で、割合は17%であった。中区の各学区をみると、大須の人口は7,201人で、老松、橘、新栄に次いで、4番目に多い。大須の男女比をみると、男性が3,377人、女性が3,824人と大差はない。大須学区の65歳以上の人口は、1,417名で、中区の全11学区のなかで一番多いことがわかる。また、年齢別の人口割合をみても、御園学区の21.6%に次いで、大須が19.7%と高く、大須の高齢者数が多いだけでなく、その割合も高

ii 社会変動を急激に引き起こしている現代史のなかで、この時点の変動の様態を明らかにするために、このときの人口構成を提示することに意味がある。

いことがわかる。5人に1人が65歳以上の高齢者である。

次に、ひとり暮らしの高齢者数をみると、65歳以上の高齢者数が多いのは、新栄と大須である(表2参照)。「商店街だから、老人も店番をしている」「(「にこにこ」利用者Sさん談)というように、大須は商店街があるため、同居が多い。そのため、ひとり暮らしの割合が少ないほうである。

中区役所の職員によれば、月1回、民生委員の自主的な活動によって福祉部に報告があるが、数字は民生委員が把握しているのみである。この報告によって、高齢者福祉相談員2名が相談や訪問などの対応をしているという。

2-2. 大須の高齢者コミュニティ形成の取り組み

「にこにこ」という巡回型の福祉は、名古屋市独自のアイデアで、「巡回型高齢者自立支援生きがい通所事業」として、中区が2001年から始めた取り組みであるⁱⁱⁱ。これを始めるにあたっては行政任せにせず、大須のセツ寺住職で大須学区区政協力委員長(当時)だった蟹江良三さんたちも豊田市や知多方面にも視察に行き、よいところを取り入れて事業を築いていった。こうして、「にこにこ」は、社会福祉法人名古屋市中区社会福祉協議会によって、大須を皮切りに始まった。大須学区では、中区社会福祉協議会の地域福祉推進指導員主事(当時)だった染野徳一さんが主に事務を担当し、ヘルパー2級の資格をもった「生きがい活動支援員」(以下、支援員)の鎌田直子さんが現場で活動をしていた。

「自立支援が目的で事業が始まったが、結果として地域でお年寄りの集まる場を作る取り組みとなった」(染野さん)というように、

「にこにこ」は、まさに高齢者が行政の取り組みを通して、高齢者のための井戸端会議の場所を与えられたようなものであった。会場の設定も、高齢者に配慮されている。区内の上前津福祉会館を高齢者コミュニティの場に設定する予定だったが、足腰が悪くて遠方から来ることが困難な人が多かったり、物理的な距離があると高齢者同士がなかなか親しきれなかったりするなどの理由から、より地域を狭めることになった。そこで、大須学区は、商店街内にあって立地条件のよい「大須コミュニティセンター」を利用場所に設定した^{iv}。地域が狭いため、利用者は、コミセンまで徒歩か自転車で行き来することができる距離になった。このコミセンがある大須商店街は、店主も客も若年層や外国人が多いが、高齢者が店番をしている店舗も多数残っている。

「にこにこ」の定員は20名だが、2004年当時の利用者数は22名いた。女性18名、男性4名で、そのうち夫婦での利用は2組であった。残り18名は、孤立に向かわない何らかの共同社会をお互いに作りあげている。この22名のなかで、大須1丁目の利用者は13名で、他の地域より圧倒的に多かった。それは、ボランティアの橋本泰造さんの働きかけがあったからである。橋本さんは大須生まれの大須育ちで、父の後を継いでテラーを営んできた橋本さんは、若い頃から大須1丁目の町内会の役員を務め、長年にわたって民生委員も務めてきた。そのため、橋本さんの周りには、地域での信頼関係や交流があった。中区が「にこにこ」利用者を広報で募集したが希望者がおらず、橋本さんが1丁目在住の高齢者宅を回って、参加を呼びかけた。こうして「にこにこ」の参加は8人ぐらいから始まっ

iii 「にこにこ」は、名古屋市高齢者はつらつ長寿推進事業として「はつらつクラブ」に名称を変更し、規模を7カ所に拡大して現在も継続しておこなわれている。

iv 大須のコミセンは、大須商店街組合会館ビルの4・5階にある。平成12年1月21日に開館した。名古屋市が半分ほど出資し、残りは地域が負担している。主に利用料で運営し、地域で維持をしている。

たが、その後、クチコミで一人また一人と増えていった。橋本さんを中心として活動するので、出しゃばる人がおらず、比較的まとまっていた。ニューカマーは、最初からいたグループに加わる形で「にこにこ」コミュニティに入っていく。大須4丁目在住の「にこにこ」利用者はOさん夫妻だけである。Oさんは、橋本さんのところで丁稚奉公をして、そのあと戦中は矢場町、橘などを転々とした。戦後、大須で偶然橋本さんの父と再開して、再び橋本さんの元で職人として働いたという縁がある。そこで、Oさんも橋本さんの誘いで「にこにこ」に参加するようになった。筆者が参加した「にこにこ」創設3年目も、「一枚岩」というわけにはいかない主張の多い高齢者が集まるわりにコミュニティとして成り立っていたのは、橋本さんの存在が大きかったといえる。

「にこにこ」事務担当の染野さんはこのように話す。「今まで家に籠もりっきりで、着替えもしないまま一日中過ごしていた人でも、この会がある日は化粧をして出かけるようになったと聞いている。（「にこにこ」開始から）3年経ってようやく利用者同士の横のつながりができるようになってきたようだ。この事業で知り合って（一緒に）旅行にも出かけるようだ。今、大須でも気楽に集まる場所がほとんどない。だから、今の人はまだいいと思う。こういう類の会ができる前は、あまり外に出なかったのではないか」。これを裏づけるように、各利用者は、「ここに来るのは、ほんと楽しいわ。今までいろんなことをやったし、いろいろなものを作ったのよ」（Sさん）、「犬や猫じゃ相手にならない。やっぱり人が一番」（Yさん）、「にこにこクラブに参加するまで、あまり外に出なかった。でも、今は人と話するのが楽しくて仕方ない」（Hさん）という。「にこにこ」は、利用者にとって、同世代コミュニティの場なのである。利用者が気分よく利用できるのは、染野さんや

鎌田さんが、柔軟に対応するからであり、そして、橋本さんが、利用者の不満が噴出しないように調整役を担っていたからである。

大須学区区政協力委員長（当時）の蟹江さんは、「にこにこ」のことを「本来、健常者が利用する会ではないのだが、言い方は悪いが、ボケ防止のための会。だから、折り紙とかやって頭の体操をする。大須は高齢者が多いから、実際は75歳以上が対象。それより若い人が来ると、周りはまだ早いと言って会に入れない」という。なかには、一度参加してみても「わしにはまだ早い」と利用を見送った人もいる。しかし、学区のご近所が集まるだけの会合というだけでもない。なかには、ひとり暮らしや、家では家族と同居していても全く会話をしない人もいる。そういう高齢者にとって、「にこにこ」は、孤立する高齢者が人と人とのつながりを確認する空間にもなっているのである。

「にこにこ」の定員は20名としているが、回覧板ではなくクチコミで広がり、時間とともに待機をする参加希望者も出てきた。毎回ボランティアを含めて25人ぐらいに限定しているのは、それ以上だと支援員の鎌田さんの目が行き届かなくなるからである。当時、新規利用者は大須ほか、もう1カ所で利用希望者が入会の待機中であった。介護保険制度を利用することになると、そちらに移行するので辞めざるを得ず、新規の参加者の枠ができる。しかし、「よく入会のことを聞かれる。卒業がないから、私たち一期生がのさばっていいのかと思うときがある。でも、なくなったらどうしたらいいかとも思う」（Oさん妻）という声があるように、筆者が関わっていた3年間、入れ替わりがなかった。それだけ「にこにこ」は、高齢者にとって有意義な時間を持つ機会であり、継続できる環境だったのである。

3. 大須商店街内の「にこにこ」に集う高齢者

民生委員協議会長（当時）の後藤喜八郎さんは、「大須の高齢者は、周囲から見ると「社交ずれ」している」という。人付き合いがいいということだが、高齢になると孤独になる。その反面、煩わしい関係はもちたくないと思う気持ちもあると、後藤さんは察する。

同世代の「適度な」コミュニティが必要である。「ここに来ると自分の歳を忘れる。でも、家に帰ると現実に戻ってしまう」という利用者にとって、週に1度の集まりは、その「適度な」楽しみである。近所で誘い合って出かけ、コミセンのビルの1階エレベーター前で他のグループと待ち合わせをする。まるで学生のような感覚で、会場に集まってきていた。

3-1. 「にこにこ」の利用者と活動状況

「にこにこ」の利用者数は、大須22名（平均年齢79.9歳）、千早21名（77.9歳）、名城16名（79.2歳）、橘16名（78.4歳）であった（表3-1参照）。男女比をみると、大須の場合、女性20名・男性2名、千早は女性20名・男性1名、名城は女性15名・男性1名、橘は女性14名・男性2名である。どの学区をみても、圧倒的に女性の利用率が高い。大須では、ひとり暮らしが5名いる。また、家族と同居していても、全く話をしないという人も参加している。孤独を感じる高齢者に孤独を感じさせないようにしていたのが、「にこにこ」であった。「にこにこ」の利用者は「身体的にやや虚弱な」高齢者が対象にあたる。なかには、糖尿を患っていたり、歩行が不自由だったりする利用者もいたが、介護を必要としない方ばかりであった。

当時、ボランティアは大須5名（女性3名・男性2名）、千早5名（女性4名・男性1名）、

名城7名（女性5名・男性2名）、橘1名（男性1名）の18名であった（3-2参照）。このうち、最高齢の男性が83歳（大須）、女性は80歳（名城）である。ボランティアの場合、男性の割合が高くなるが、44歳（大須）のDさんを除いた17名は、全員65歳以上で「にこにこ」参加の対象者に該当する。つまり、高齢者が高齢者を支えているのである。

大須は自営業が多く、いわゆる「気がつく」人が多いため、敢えて「にこにこ」の決まりとして、次のことを挙げていた。「にこにこ」の利用料は徴収しないが、会費として月初めに500円を徴収する。10時から15時までの活動時間帯に、会場から外に出ない。1班から5班までのグループ分けをして、それを元に、右回りで座席をローテーションする。グループ単位で係を決める。当日の係は、出欠席の確認や弁当代金の集金、開始時・昼食・終了時のお茶出し、弁当配布、片づけ（湯呑の洗浄、教室の掃除、布巾の洗濯、ごみの持ち帰り）をグループで分担してこなす。柄物の教材を分けるときはくじ引きをして、最後まで公平性を保つことを心がける。また、月末の活動では、利用者の誕生日のお祝いがある。支援員の鎌田さんからプレゼントや、利用者全員から歌の合唱、お茶菓子でお祝いをする事になっている。ある月は、ひとり暮らしのIさんの誕生日会であった。当月は休んでいたが、Iさんのお祝いをするために「にこにこ」に出てきた利用者が2名いた。毎月の行事を通して、こうした高齢者同士の付き合いが自然にうまれているのである。

当時は1日の活動であったので、会場で昼食をとる。最初は弁当持参としていたが、自営業で弁当を作る手間がかけられない人が多いため、当日の午前中に弁当の注文を取るようになった。弁当を持参する利用者はほとんどおらず、菓子パンを買ってくる以外、大半

v 弁当の代金の一部は社会福祉協議会が負担している。

が一食300円の弁当注文を利用する。行政が利用者の生活実態に応じて対処したことも、利用者の継続につながった。食中毒などで弁当屋に迷惑をかけないために、弁当の残りを持ち帰らないというもの決まりである。

「にこにこ」の活動メニューは、ヘルパー2級の資格をもつ支援員の鎌田さんが決めていた。鎌田さんは、大須・名城・栄・橘の4ヶ所を担当しているため、大須とその他の地区との比較もできる。最初は毎回時間を決めてきっちりやっていたが、大須の人はおしゃべりが多いのでやめたという。あるとき行事予定が決まらず空けていたら、利用者側からやりたいものがあると意見が出たので、鎌田さんは、利用者の希望を取り入れて活動予定を決めてきた。大須の利用者は自己主張する。しかし、何がやりたいかと聞いてもなかなか具体的には言ってもらえない。だが、こちらから聞くことはせず、じっと待つ。適度に距離をとるなかで、鎌田さんは、自分のカラーも出しながら、まとめ役の橋本さんと連携して活動を進めてきた。

「にこにこ」での活動は、鎌田さんが地域

性を汲み取り、アイデアで学区ごとに趣向を変える。大須は、手工芸と雑談の時間が多い。外部講師を呼ぶ日の半日は、予定を入れずに空けている。大須学区はおしゃべりが好きな人が多いので、雑談で終わることも多いからである。利用者のなかには活動内容を他学区と比較して、「名城はわたしたちとは違う。名城は格がもっと上」「名城は『にこにこ』でお絵描きや和歌を習っている」と、名城学区への「対抗心」をみせることもあった。民衆の大須学区としてのプライドが見え隠れする。

ある日の大須の活動を例にとると、10時20分から12時まで、折り紙でバラの花束を作るようになっていた。しかし、季節に合わせて紫陽花に変更して工作をした(表4参照)。これを作るのに必要なものは、利用者が各自道具箱に入れて持参する。「にこにこ」立ち上げ以来、毎月1回来ていた折り紙教室の講師が、「大須はしっかりした人が多いから、子どもだましというわけにはいかないから大変だ」と言っていたことがある。材料を用意するのも、アイデアを考えるのも毎回違う作品をつくるように心掛けていた。

表3-1 利用者の年齢と平均年齢(2004)

大須		千早		名城		橘	
性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢	性別	年齢
女	79	女	74	女	68	女	70
女	76	女	77	女	74	女	69
女	86	女	86	女	86	女	78
女	78	女	82	女	79	女	87
女	79	女	74	女	76	女	66
男	88	女	79	女	66	女	85
女	79	女	77	女	83	女	74
女	74	女	74	男	92	女	77
女	80	女	74	女	86	女	77
女	81	女	83	女	86	女	77
女	76	女	77	女	88	女	80
女	80	女	74	女	83	女	91
女	78	女	78	女	71	男	76
女	94	女	84	女	85	女	72

(8) 高齢者を周縁化させない大須コミュニティの取り組み

女	76	女	80	女	71	女	83
女	81	女	74	女	71	男	92
男	74	女	79	平均	79.2	平均	78.4
女	74	男	72				
女	76	女	86				
女	93	女	75				
女	80	女	77				
女	76	平均 77.9					
平均 79.9							

表3-2 ボランティアの年齢 (2004)

大須		千早		名城		橘	
男 (A)	83	男	77	男	79	男	67
男 (橋本)	77	女	75	女	78		
女 (B)	76	女	77	女	68		
女 (C)	69	女	74	女	71		
女 (D)	44	女	72	男	69		
				女	80		
				女	71		

(鎌田直子さん提供の資料を基に筆者作成)

表4 「にこにこ」活動予定 (2004年5月)

日時	活動内容	持ち物	備考
3日 (月)	憲法記念日のためお休み		
10日 (月)	午前 折り紙工作 『バラの花束』	筆記用具・はさみ・ボンド・ものさし	外部講師
17日 (月)	1日 リクエストタイム 『お財布づくり』	筆記用具・はさみ・ボンド・ものさし	
24日 (月)	午後 体操	運動のできる服装	外部講師
31日 (月)	午後 音楽	運動のできる服装	外部講師

外部講師を呼ぶ取り組みは、「にこにこ」時間内で終了することがない。地域の計らいで、外部で工作の展示をしたり、敬老会の行事である「敬老のつどい」では、音楽活動の一環として利用者とボランティアによるハンドベルの演奏を披露したりしてきた^{vi}。高齢

者も内に閉じるのではなく、外へ発信する力があるのである。

折り紙工作が終わり、12時15分から昼食を摂った。そのあと13時から10分間、ボランティアの橋本さんによって、次回の「財布づくり」の絵柄を選ぶためのくじ引きがおこなわれ

vi 中区の高齢者人口が増加したため、地域型在宅介護支援センターが新栄学区にできたが、これが75歳以上の高齢化率を上げていることにつながっている。敬老の日お祝いの対象は、70歳以上であった(2004年当時)。「敬老のつどい」へは、約1100通の案内状を出し、粗品などは750個ほど用意した。

た。手先を使う作業は、脳の活性化を促すためでもあるが、大須は元職人や商売人が多い地域で手先が器用な人が多いため、他の地区と比べても、手先を使う機会を増やしている。このように、地域の独自性を活かして活動することで、他との差別化もはかってきた。

13時25分から14時まで、鎌田さん主導で「連想ゲーム」、14時30分から30分間、お茶を飲んで休憩であった。お茶に添えるお菓子は、中区社会福祉協議会からの差し入れで、利用者にとって一番楽しみな「おしゃべりの時間」である。この雑談時間の延長線上に、後述する帰宅前の喫茶店での有志の集まりがある。

大須の利用者は自立した人たちばかりだからこそ、鎌田さんがボランティアを含めて25人の面倒を見るのは大変である。例えば、「順番に」ということができないため、テーブルやイスの片づけを待たなくて全員が動いてしまう。このように、利用者は主張が多く、協調性に欠けて周囲が混乱することが頻繁にあった。表面に出ていないだけで、当番が動く動かないで、ゴチャゴチャともめることもある。そういった不満は、ボランティアの橋本さんに集約される。上手くいっているようにみえるのは、表に出る前に橋本さんが各利用者の間に入ったり、鎌田さんに依頼したりして調整役をしてきたからである。

3-2. 利用者を支える同世代ボランティア

大須では、毎月必ず工作の時間を取っているが、やはり手がかかるので、ボランティアが各グループに一人ずつ入ると作業がしやすい。「可能であれば、工作のボランティア・体操のボランティアというように、それぞれの場に合ったボランティアがいるといい」(鎌田さん)というのが、現場の声である。

中心人物の橋本さんが町内会長や民生委員をしていたとき、地域で絶大な信頼はあったものの、同年代の高齢者にとって近寄りがたい存在だったようである。挨拶程度の付き合い

いだけで、お互いのことをよく知らなかった。そのため、1丁目在住の利用者は、橋本さんの「にこにこ」への誘いに渋々承諾した人ばかりであったが、橋本さんへの信頼があつてこそ、垣根を越えた付き合いができるようになっていった。それが、「にこにこ」帰りの喫茶店で、互いに言いたいことを言う付き合いにつながっている。

ボランティアと利用者の境はなく、工作、体操、音楽、すべて同じ作業をする。ここに、高齢者が高齢者を支える構造がある。大須には、橋本さんの他に3名のボランティアがいる(表3-2参照)。男性Aさんは83歳であったが、町内会長の経験があり、利用者の立場にはなりたくないという意識が見え隠れする。女性Bさんは、大須学区在住の76歳であるが、「シルバー人材センター」に登録していて、ボランティア精神にあふれていた。「高齢者の面倒をみる人」が、「高齢者と同世代」である。女性Cさんは、夫が亡くなったあと、栄に中古マンションを購入してひとり暮らしをしていた。毎月1回の「ひとり暮らし食事会」には、栄で参加している。Cさんは、「にこにこ」には希望して入会したが、若い(当時69歳)という理由でボランティアという立場になった。Cさんにとっては、大須の高齢者の「使えるものは使う」という意識に隔たりも感じていた。大須でのボランティアを辞めて、月2回、絵や料理を学ぶ栄のクラブの利用を検討していた。これは、Cさんが単独行動を好む性格や、亡夫が県庁に勤めていたというプライドも一因である。庶民の大須とはいえ、栄に住む一回り若いボランティアに対して手厳しい一面もある。

ボランティア最年少、44歳のDさんの誘いで、隣の松原地区から大須の「にこにこ」に参加しているのは、TさんとFさんであった。Dさんは、自営業で時間の融通がきくということで、子どもが小学校卒業後も地域の子供会の世話役を継続して務めてきたボラン

ティア魂のある女性である。TさんとFさんが住む松原学区は、橘の「にこにこ」に該当するのだが、橘ではいじめがあって馴染めなかったのも、大須の気楽さに惹かれて移動した。Dさんはボランティア歴が長く、運営方法に口をはさむこともあった。そのため、ボランティアのDさんと、活動をまとめる鎌田さんの間にも橋本さんが入って上手くまわしていったのである。

3-3. 井戸端会議の延長—高齢者間のネットワークング

「にこにこ」への入会方法は、クチコミである。「募集が回覧板でまわってきたけど、まったく興味がなかった。でも、橋本さんや橋本さんの奥さんに頼まれた承諾した。きっかけはこんなふう。今の様子からじゃ考えられないでしょ」(利用者Mさん)、「自分たちがいくらチラシを配っても参加してくれない。全てクチコミ。橋本さんがいるからこそ、会がまとまっている」(事務担当・染野さん)というように、クチコミの力は大きい。名古屋は喫茶店のモーニングが盛んな土地柄である。高齢者も人付き合いによる情報交換を大切にしているのである。

「にこにこ」では、おおよそ14時半ごろから茶話会になるのだが、15時に活動が終わると、その延長で、利用者の多数を占める大須1丁目在住者が中心になって、商店街近くの喫茶店に集まる。そして、1時間ほどコーヒーを飲み、添えられる菓子を食べながら、「にこにこ」の反省や時事問題、近所のうわさ話を共有する。以前は、「喫茶シルビア」で集まっていた。しかし、コーヒーに豆菓子などの「おまけ」をつけてくれないのが不満で、2丁目の「ミモザ」や1丁目の「コメダ」で集まることになった。表2-1でみたように、大須学区はひとり暮らしが新築に次いで多かった。橋本さんを含め、常時7〜8人が喫茶店に集まるのだが、そのなかでひとり暮らしの

利用者が4人いた。集まりの半分がひとり暮らしである。このように、ひとり暮らしを一人にさせない、自主的な活動として社会的連結の装置がうまれているのである。

大須3丁目在住で息子と同居の男性Nさんは、「にこにこ」終了後、ときに自宅と逆方向の喫茶店に同行し、コーヒーを飲みながら、楽しそうに話を聞いていた。商売をしているIさんは、毎朝モーニングに番頭と2人で出かける喫茶店の常連であったが、それとは違う同世代での会話の賑やかさを楽しんでいた。SさんとHさんは、息子同士が同級生だったので50年来の友人であるが、ともに家でコーヒーを飲むので、喫茶店で会話をするようになったのは、「にこにこ」がきっかけであった。Rさんは、ひとりで喫茶店に行かないが、「にこにこ」と「ひとり暮らし食事会」の帰りだけは立ち寄ると決めて、それを楽しみにしている。ボランティアのBさんは、コーヒーが飲めないから喫茶店には行かないと言いつつも、「にこにこ」のあとの談笑には付き合うこともある。Hさんは、あまり外に出なかったが、「にこにこ」に参加してから、人と話をするのが楽しくて仕方がない。もちろん、帰りの喫茶店も必ず行く。

Rさんは、同世代と話をしながら昔を思い出す。質屋に嫁いで義母と30年間同居したが、外で悪口を言うといけなかったからと、娘の幼稚園にも行けず、外に出してもらえなかったと嘆く。するとHさんは、夫が末っ子だったので同居は10年で済んだという話をする。Tさんは、糖尿病が悪化し、身体のあちこちに支障が出ている。飲食が制限されるが、喫茶店に付き合っ、周囲に病気の話を聞いてもらう。

ほかにも、時事問題や、スポーツについても詳しい話が飛び交う。「球場まで見に行くほどでもないけど、野球が好き。中日が強いといい、巨人弱いなあ」(Sさん)、「サッカーのワールドカップを早朝4時に起きて観て

いる」(Mさん)、「わたしは結果だけ見てる。野球もそうだけど、わたしが観ると負けるもん」(Hさん)。誰かが話し出すと、自分の領域で話題を出す。こういった「競い合っている」ともとれるスポーツ談義からも、高齢者が常に社会とかかわろうとする姿勢がみてとれる。

「にこにこ」の活動中には表面に出ない小さな不満や希望が、終了後の喫茶店内で出ることもある。橋本さんは、喫茶店でのちょっとした声を集約して、次の「にこにこ」の活動がうまくいくように注意をはらう。喫茶店での談笑は、小さな情報を吸い上げる場にもなっている。この時間は、官の鎌田さんと民の橋本さんの接合に不可欠であった。

あるとき話が盛り上がり、次第に色恋の話になっていった。Mさんがパートで一緒だった、近所に住むひとり暮らしの女性Yちゃんのことである。「どこが悪いのか分からないが、介護保険を使って、週3回ヘルパーさんが掃除に来ている、2部屋しかないのに。ヘルパーさん、掃除するところがないから、外枠のサッシの溝を拭いてる。月・水・金はヘルパーさん、土曜は彼氏。Yちゃんは猫を2匹飼っているけど、彼氏が来ると猫は2階のベランダに出させられちゃう。夏、暑くなると、外にイス出して涼みながらYちゃんのとこの猫を見てる。まだ外にいと、ああ、まだ彼氏おるんだなと思って。80歳過ぎとるのに、よーやっとなる。調子悪そうにしとるで心配するけど、彼氏が来る日は元気がいい。勢いよく自転車に乗ってるわ」。このような内輪話も大いに盛り上がる。「にこにこ」活動をきっかけにして、思わず立ち寄りたくなる、楽しみになる、高齢者同士の自主的なコミュニティが、こうして出来上がっているのである。

4. まとめ—行政を「利用する」都市高齢者のコミュニティづくり

「にこにこ」には、官から民へという役割(鎌田さん)と民から官へという役割(橋本さん)の両方がいる。鎌田さんが25人全員の詳細を見ることができないのを橋本さんが面倒を見る。このように、〈官から民〉で処理できないことや利用者の不満を橋本さんが「にこにこ」のあと喫茶店で聞き、それを次回に鎌田さんが生かす。逆に〈民から官〉で伝わらないことを、鎌田さんが吸い上げる。互いに接合することで、官と民が協同した高齢者コミュニティを形成することができたのである。

「社交ずれ」した高齢者が多い大須ならではの特徴を生かして、外部講師が来る日は半日茶話会の時間にあてる。他の学区と足並みを揃えない独自のカリキュラムによって、「にこにこ」利用者である高齢者は、それまで近所の知り合い程度の小さな点だった関わりを、線にして結び、それを拡大してきた。ここには、高齢者が高齢者ボランティアによって支え合っている構造もある。他の世代との結びつきが積極化されれば、それはよいことである。だが、高齢者の同士の日常的なコミュニケーションによって、相談や不満解消がよりスムーズにいく側面もある。

工作を外で発表する場があったり、イベントで音楽活動を披露する場があったりするのには、大須の住民自治と地域行政の組織が網の目のように密になり、行政と民間が協同して高齢者を下支えする連携ができているからこそできる取り組みである。このように行事複合が用意されているのは、高齢者が社会的な接触をするようになっていることを表している。これに沿って、狭から広に高齢者の機会と社会的空間が広がるのである。

大須では、若者や外国人が大きな割合を占めるなか、高齢者は、外国人に対しても偏見

の目を持たずに、隠れもしないし自己主張もしない。しかし、高齢者は、生活情報交換の場を、喫茶店という外の空間で作り上げる。地域や行政組織に後押しされて、高齢者は、潜在的に秘めていた「生きるたくましさ」をこうして発揮する。これは、行政から降りてきてその枠組みを具現化する染野さんと鎌田さん、そして、民衆側の橋本さんが行政と民衆のメディエーターになって、高齢者を孤立させない取り組みをしているからである。

密度の高い社会的接触の蓄積がなければ、他者に自らの不満や喜びや困窮の感情をあらわすことなどあり得ない。だから、メディエーターとは、そうした利益のぶつかりや感情的摩擦を経験し、それを乗り越えてきた時間性と歴史性の幅をもつ人物になるのである。まさに橋本さんは、利用者に対して、そして利用者とともにそうした経験を蓄積したメディエーターなのである。

行政側で中から選ばれた「地域福祉推進指導員主事」や外から来た半官半民の立場の「生きがい支援員」が密に連携し、利用者をまとめるボランティアによって、学区という形態でも官と民が接合している。こうして、大須では、外国人も高齢者も周縁化されないコミュニティが作り上げられているのである。

付記

筆者は、名古屋大学の和崎春日教授（当時、現中部大学）ゼミでの大須調査の一環で、2004年から「にこにこ」に参加した。あれから約10年、この間に「にこにこ」は「はつらつクラブ」に名称変更し、午後だけの半日の活動になった。2013年11月、筆者は、現支援員の計らいで、橋本さんにお会いすることができた。体調がよくないときもある、耳が遠くなったと言いながらも、利用者から工作材料の費用を徴収して世話をやく様子は、筆者が参加していた頃とまったく変わらなかつ

た。すでに当時の利用者はいないが、自分の息子を「にいちゃん」と呼ぶように、筆者を「ねえちゃん」と呼んで親しく接してくれた「ばあちゃん」たちの姿が蘇る。筆者は「にこにこ」が終わってからの喫茶店で「井戸端会議」の仲間にも入れてもらい、橋本さんをはじめ、多くの高齢者に人づきあいを学ばせてもらった。また、最初に筆者を快く受け入れてくれた染野さんと鎌田さんには、支援の在り方を間近で学ばせてもらった。関わった大須のみなさんに、この場を借りて感謝の辞を表します。

参考文献

- 長坂康代.2008「ハノイにおける宗教祠堂の帰属性をめぐる一考察—ベトナム都市生活における人びとの生活戦略と生活原理」『比較民俗研究』22:11-30.
- 長坂康代.2010「ベトナム・首都ハノイの同郷会をめぐる都市人類学的考察—同郷会における都市内の活動と都市・村落関係—」『東南アジア—歴史と文化』40:79-99.
- 名古屋健康福祉局.2003『高齢者健康と福祉のあらまし 平成15年8月現在』
- 小川全夫.1996『地域の高齢化と福祉—高齢者のコミュニティ状況—』恒星社厚生閣
- 大須観音通商店街振興組合.1989『大須観音通商店街まちづくり計画報告書』
- 中田実・谷口茂.1990『名古屋・第二の世紀への出発』東信堂
- 和崎春日.2011「民族交流都市・大須の自他融合～滞日アフリカ人から若者・芸能者まで」『貿易風』vol.6:1—20.
- 中日新聞（夕刊）2006年6月30日